

## 描かれた背架

織野 英史<sup>※</sup>

### 1 『玄奘三蔵像』 笈の縦木湾曲

『玄奘三蔵像』<sup>(1)</sup> (写真1) で玄奘三蔵背負う運搬具は笈の一種である。これを木枠型背負運搬具である背架と結び付ける者はいないだろう。図をよく見ると竹製らしい枠の上部が前方に湾曲していることに気づく。これは天蓋をしてそこから香爐を吊り下げるという行脚僧独特の様式によるものである。しかし同時にこれによって重量を前方に掛けて安定を保ち、かつ軽く運ぶという工夫にも見える。実はこの湾曲が、筆者の拙い見聞によっても、少なくとも陝西省南部から貴州省や雲南省に掛けて広く分布する背架<sup>ベイチヤ</sup><sup>(2)</sup>に見られる特徴なのである。背架が笈から発生したのか、あるいはその逆か<sup>(3)</sup>、共通の原型から進化した民具なのかは論議があるにしても、この共通性の発見は『玄奘三蔵像』をいきなり重要な背架関連資料とした。

さてこの絵図は鎌倉時代前期に日本で成立したとされる。同じ鎌倉時代のものと伝えられる八王子の金剛院所蔵の『釈迦十六善神』画像<sup>(4)</sup> (写真3) 中にも右手に扠子、左手に経巻を持つ玄奘三蔵と見られる人物が描かれており、背に『玄奘三蔵像』同様の笈を背負っている。これらには、すでに中国で出回っていたモデルがあったと考えるのが一般的である。残念ながら該当する資料が少なく、そのことは拓本<sup>(5)</sup> (写真2) で示すように中国で1933 (民国22) 年に興教寺慈恩塔院三墓塔が造営された際、玄奘影として東博本が採用され、模刻されていることでも解る。筆者は当時の中国の風俗を伝える一級資料である北京故宫博物院所蔵の『清明上河図』<sup>(6)</sup> (写真5) と敦煌出土の『行脚僧像 (唐僧取経図)』<sup>(7)</sup> (写真4) の2例と、若干の山水画の中に小さく大雑把に描かれたのを指摘できる程度である。

『清明上河図』は宣和年間 (1119~25) に山東省東武 (諸城) 出身の張擇端が描いたとされる巻本で、北京故宫博物院本以外にも明の仇英 (1482~1559) 作ほか、多くの模作が残っているが、北京本は張擇端筆として最も信頼できる資料である。これらの全体像については別項に述べることにする。この絵図で描かれる北宋末期の首都開封の賑わいの中には33点にのぼる扁担 (天秤棒) や6点の手推車 (独輪車) などの運搬具が見られる。それらの中に一箇所だけだが笈を背負った行脚僧が描かれている。これも『玄奘三蔵像』と同じく、天蓋から香爐を吊り下げており、竹あるいは木製の縦枠が上部で前方に湾曲している。

敦煌莫高窟藏経洞出土『行脚僧像 (唐僧取経図)』<sup>(8)</sup> は絹絵2点、紙絵5点の7点が知られている。これらについては秋山光和の「敦煌画虎をつれた行脚僧をめぐる考察」に詳しい。絹本2点はパリの国立ギメー東洋美術館蔵のもの (ペリオ本) で、笈の形態は竹製円筒籠の頂上に天蓋

※高松商業高校教諭



1 玄奘三蔵像(東京国立博物館蔵)



3 釈迦十六善神画像  
(金剛院蔵)



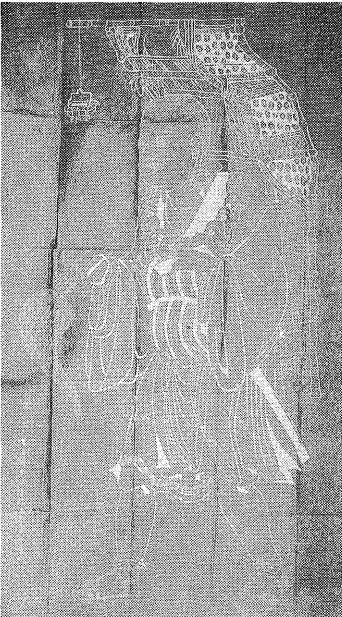
5 『清明上河図』の行脚僧(中國美術全集絵巻編3兩宗絵巻上より)



4 ペリオオ本行脚僧像(日本放送出版協会『NHK大英博物館』5より)



6 台北の放送局の人形(香川量平氏撮影)



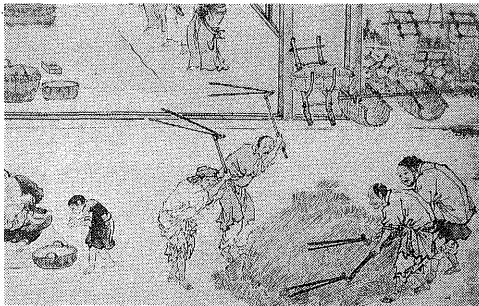
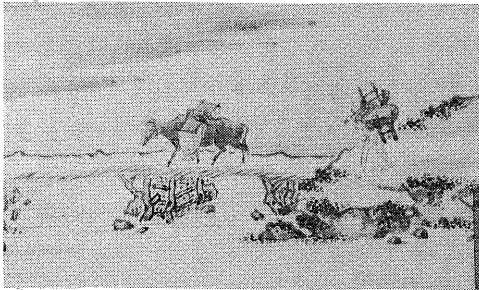
2 「民國二十二年」 扱本刷



7 『慕帰絵詞』巻七の笈(浄土真宗本願寺派提供)



8 范寛『谿山行旅圖』の背架(王耀庭  
『中国絵画のみかた』二玄社より)



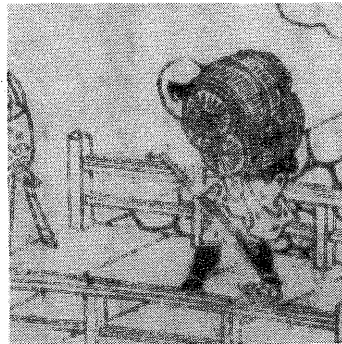
10・11 狩野山雪『四季耕作図屏風』の子ゲ



12 『江戸名所図絵』の背負様子



9 貴陽付近収集の背架



13 『都名所図会』の背負縄



14 ウルのスタンダードの背架  
(『美の誕生』講談社より)

が付けられ、4本足らしい。そのうちの一つは筧が頭より下に収まっており、小形の籠筧で縦木湾曲もない。また僧侶は杖をついて立ち止まっている。これに対し、もう一つは頭よりかなり上部に天蓋を持つ体側に湾曲が認められる大形の筧を背負っている。筧は紐で止められ、僧は右手に数珠を持っている。

『玄奘三蔵像』と持ち物は違っているが、手の差し出し方、脚絆の状況、歩く姿である点など筧以外の共通点も多く、このような画像が『玄奘三蔵像』の手本になったのかも知れない。

山西雁縣木塔の『採藥圖』<sup>(9)</sup>は遼時代の薬草を採取する僧を描いているが背負っているものは籠筧らしく香爐を前に吊るし杖を立てているのが特徴的である。立てた棒で背負うというのが中国東北地方では行われていたというが、それにも繋がるようだし、敦煌画絹本や『清明上河図』行脚僧との共通性も指摘できるだろう。

紙本の方で最も知られているのはスタイン収集、大英博物館蔵の2点のうちの1点である。写真4に示す通り絹本と比べると稚拙な印象を拭えない。筧は小形で日本の箱筧に似ており、絹本と著しい違いを見せている。韓国国立博物館蔵本は箱筧の形状がはっきり描かれており、日本の箱筧が中国起源であることを明確に伝えている。さて、これらの画像は共通して筧を背負い虎を伴っており、この点で松本榮一<sup>(10)</sup>のようにチベット（西藏）のダルマターラ（達磨多羅）画像の一種であるとする説も有力である。チベットのダルマターラは十八羅漢の十七尊者に数えられるが、画像に現れる筧は典型的箱筧である。画風から敦煌画絹本のうち、より古いと考えられる縦木湾曲の大形籠筧を背負う方の成立を秋山は吐蕃期占領（781～848）から張氏帰義軍期（848～920）初期と考えている。『玄奘三蔵像』筧の縦木湾曲はすでに九世紀半ばには見られたと考えることができよう。

写真6は台北市内の放送局に展示してある竹製の筧を背負う玄奘三蔵像<sup>(11)</sup>である。最近の著作ではあるが、段開麗『中国民間方言詞典』（南海出版公司、1994）には「背夾馬」の項目があり、「山区人用来背東西的竹，木制工具」とあり、背架に竹製品があることを示しているが、雲南省石林などで竹製の背架が使用されていたとの情報も得ている。

さて、幸い日本には現物の筧が少なからず残されている。岡崎讓治『修験道山伏筧概説』<sup>(12)</sup>では30点の箱筧を取り上げ、4点の板筧に言及している。岡崎は板筧を「負い子から発達したものだと思われ」と、石田茂作<sup>(13)</sup>の「杣筧＝おいこ」分類を踏襲して筧、背架の關係に触れているが、取り上げた筧に縦木の前方への湾曲はない。頭上に円蓋を持つ、あるいは香爐を吊り下げる筧は近世末、六十六部行者の筧に表れる。このことは藤田定興『六十六部・行者の筧』と小嶋博巳『廻国行者と天蓋六部』<sup>(14)</sup>に詳しい。彼らを取り上げた絵画資料の中で1798（寛政10）年刊の北尾政演『四時交加』のみ縦木の上に続けて円蓋の上部に差し出した屋根のような湾曲部分が見られる。ただしこれも縦木湾曲とはいえない。ただ玄奘三蔵像に繋がる形状ではある。

ついでに触れておくと、中国に嬾架という道具がある。これは『三才図絵』<sup>(15)</sup>に「臥視書」と説明される竹杵であるが、背負う縄を持たないところを除けば、まさに玄奘背負う筧そのものといってよい。筧は書をも意味する。勿論上部縦木の湾曲も存在する。この道具も書を読む道具

に違いがない。形態を同じくする道具が一方で学問の旅の運搬具として、一方で怠惰な勉学の用具として用いられることを考えると、これらはもともと書架（ラック）という共通の起源を持つものなのか、あるいは笈が転じて書架となったのか、何らかの関連を考えずにはいられないところである。魏武帝というから3世紀に遡る。

## 2 『慕帰絵詞』の笈

縦木上部が湾曲した笈といえ、気になる資料が日本にある。『絵巻物による日本常民生活絵引』<sup>(16)</sup>で「背負子」とされ、絵画表現された同類の運搬具の初出と考えられた1482（文明14）年補作の藤原久信筆『慕帰絵詞』<sup>(17)</sup>第7巻に描かれた背負運搬具<sup>(18)</sup>（写真7）である。『慕帰絵詞』自体は1351（観応2）年成立の覚如の伝記で絵師は藤原隆章、隆昌。本願寺所蔵のものが足利義政によって借り上げられ、1481（文明13）年に返却したときに欠損していた第1・7巻は翌年、補作された。さてこの背負運搬具は、実は四本の足の箱笈風の運搬具を想定できる表現がされている。背負っている人物が農夫か運び人足風の人間であり、荷杖で荷を下から支えて休むところが近年の方法と共通することから、これを笈とは考えにくかったのかも知れない。これにはふた通り考えることができる。ひとつはこの時期、庶民も笈を使用したのだという可能性。もうひとつは『慕帰絵詞』の作者に運搬具としては笈の知識しかなく、庶民が背負っているのを描くときにその部分だけは本来2本足なのに4本足と思い込んで描いた可能性。

さて結論はどちらともつけ難いが、縦木が前方に湾曲して描かれている点については修験道の箱笈と共通のものだとすると、実物資料に湾曲が見られないことから否定的可能性も強い。すなわち、背中に合わせて湾曲したように描いてあるだけで、これを実際の縦木湾曲とは取りにくいということである。

## 3 『谿山行旅図』の背架

范寛『谿山行旅圖』<sup>(19)</sup>との出会いは筆者にとって衝撃的であった。この中国絵画の作者は北宋時代、終南山、華山といった渭水盆地の南辺を区切る山脈に居住して山水画を描いた人である。この時期の山水画はまだ様式化が進んでおらず、写実という点では後代の山水画と比べてより信頼できる部類に属する。『谿山行旅圖』は華山の圧倒的な壮麗さが描かれた傑作でその右下に4頭の驢馬（あるいは小形馬）と前後でそれを追う農夫らしい男が描かれている。先頭の男は片方の胸をはだけて、右手に木製の鞭子（鞭）を持っているが、後ろの男は左手に杖らしい棒を持ち、背中に上部が多少前方に湾曲した背架らしいものをランドセル方式で背負っている（写真8）。形態的には前述の陝西、雲南に見られる縦木湾曲型の背架に似る。とくに貴州で使用されていた縦木湾曲無爪型の背架（写真9）に酷似している。

筆者は『谿山行旅圖』と出会った1995年11月の時点で、陝西省南部の秦嶺に背架の分布することを確認できていなかった。山西、河北の北部山岳地帯で背架が使用されていたことは染木照が紹介しているし<sup>(20)</sup>、讃岐習俗参考館長荒木計雄は第2次大戦中の1942（昭和17）年に日本軍の

一時的な作戦行動の際に陝西省銅川まで達し、そこで中国人を徴発したときに、「天秤棒を持ってくるか背負子を持って来るか」と尋ねたという。銅川は石炭の産地で、背架は30～50センチメートルという大形の石炭塊を運搬するのに使ったという。そういうことから考えると、その南の陝西省南部に連なる秦嶺の山岳地帯に分布してはおかしくない。叶大兵他編『中国風俗辞典』（上海辞書出版社、1990）には「漢族民間運輸風俗、流行于陝西南部山区」として背負運搬をあげ、「所用工具是喇 背斗一个（或繩架一福）」と運搬具をあげている。前述したように段開璣『中国民間方言詞典』には背夾馬（ベイチャーマ）の項目を立て、背架のことだとした上で、四川省東北部の大巴山での使用例をあげている。これも最近の辞書であるが、『四川方言詞典』<sup>(21)</sup>には図入りで背架を紹介している。四川省では一般的な運搬具のようである。雲貴高原に分布することと併せ考えると、背架が中国の山間部に広く分布する民具であることを想像できる。『谿山行旅圖』の存在は、それが少なくとも千年近くに互って、ほぼ同じ形態を保ってきた民具であることを証明しているのである。『谿山行旅圖』は原寸大や縮小版に盛んに写されたらしい。清時代の王翬模作<sup>(22)</sup>（1703頃）を見る限り、背架はそれが背架であることさえ明確でないほど曖昧に描かれている。模写した王翬は多分に背架の存在を知らなかった可能性がある。

さて、これらの情報をもとに背架の広域分布を確信した筆者は1996年3月、実際に華山調査を行った。残念ながら、短期間だったこともあって背架を確認できなかったが、その後、陝西省寧陝県湯坪郷で縦木湾曲で回転軸に爪を付けた背架を数点、確認することができた。これについての詳細は「秦嶺の背架と托架」『民具集積』2号（四国民具研究会、1996）を参照して欲しい。

#### 4 狩野山雪『四季耕作図屏風』のチゲ

さて中国の背架が絵図に描かれているということを述べるに際して、なぜ日本の例を併せ取り上げたかという、中国、日本双方の背架形態が共通するからである。この共通性と韓国のチゲの特異性は少なくとも三地域の背架文化がそれぞれ単独に発展してきた結果なのか、あるいは伝播の理論で位置付けて行くべきなのかという基本的な道筋の検討を念頭に置いて、これまで別々になぞってきた研究成果を共通の土俵で再構成してみる必要性を示している。そこで寄り道といわれる難を恐れず、日本の絵画資料の例をもう一つ示したい。

狩野山雪（1590～1651）筆とされる『四季耕作図屏風』<sup>(23)</sup>は現在、東京芸術大学に所蔵される八曲一双の屏風である。狩野派筆の耕作図としては、伝狩野元信（1476～1559）、伝狩野之信（16世紀）、狩野探幽（1602～74）、狩野永翁（1622～97）、久隅守景（17世紀）、あるいは尾形探香（1812～68）筆など多数伝わっている。これらが漢画の影響のもとに製作されたことは、彼らが山水画の系譜を引く絵師であることから想像に難くないが、描かれた風俗一つ一つを検証しても中国の元絵を真似て描かれたことが明白である。このような耕作図屏風が中国の『耕織図』を粉本としていることは渡部武の論考に<sup>(22)</sup>詳しいから全体の傾向についての言及や写しの系譜についての概説は避けて、ここでは今あげた狩野派筆の数点を取り上げ、特に運搬具等について検討したい。

伝狩野元信筆『四季耕作図屏風』は六曲一隻の屏風で天秤担ぎした女が右手に子供の手を引く姿、灌漑用の竜骨車の角度、苗籠担ぎの男の左下に田植えの様子を配する構図など多少アレンジしただけといったところも多く、装束も中国風である。違いが目立つところといえば、馬に牽かせるべき馬鋤を牛に牽かせている点程度である。伝之信筆は八幅の襖絵で、伝元信筆同様多くが省略されているが、子供の手を引く天秤担ぎの女、竜骨車、入倉の様子に加えて、さらに連枷での稲打ち作業、犁を牽く牛の表情さえ『耕織図』に酷似している。勿論装束は中国のものである。次に、1671（寛文11）年に描かれた六曲一双の狩野探幽筆『四季耕作図屏風』は六曲一双である。二条の連枷での稲打ちや唐臼などは同じだが、遠い背景として描かけた無人の竜骨車に代表されるように人や農具が希薄となっている。

久隅守景（旧小坂家本）でもこのことが踏襲され、省略を重ねており、竜骨車本体がなくなって、それを踏むため人を支える横木と、それを取り付けている杵及び屋根が残るというおかしな現象が生じている。勿論装束は中国風で連枷で稲を打つ人はいかにもやる気がない。ただ風景は一段と日本風になる。前述のものになかった点として、渉牛図が描かれている点があげられる。牛は水牛で、背中に乗る人は左手に鞭を持っている。水牛に鞭を持つ人が跨がる図はすでに北宋代江南の画家祁序筆『江山放牧図』<sup>(25)</sup>に現れ、渉牛図も含まれる。南宋の閻次平（12世紀）筆『牧牛図』は春夏秋冬四段に分かれ、そのうち夏が渉牛図になっている。同じく南宋代とされる『柳溪帰牧図』<sup>(26)</sup>は左から右方向へ進む図であり、守景の渉牛図と共通する。このモチーフは韓国でも取り入れられ、18世紀には李朝後期の画家金弘道も描いている。<sup>(27)</sup>ただし、こちらの方は水牛でなく牛である。守隅筆『四季耕作図』のうち京都国立博物館と石川県立博物館所蔵のものは和風化した作例として知られている。国立博物館本で注目されるのは稲藁の背負運搬である。後述するが、チゲの発達した韓国でさえ、一八世紀までは牛馬の背以外では尖棒による運搬を描くのが通例だったから、新しい点である。ただし縄か背架か、あるいは籠かは良くわからない。

さて山雪筆の『四季耕作図』のこれら他の耕作図との違いが明らかなのは、頭上運搬やチゲの存在である。元信筆の子連れで天秤担ぎの女は、ここでは頭上運搬に変わっている。頭上運搬は16世紀の『月次風俗図』<sup>(28)</sup>にも現れ、中国の絵画資料にも散見できるし、装束の点で全く韓国風ではなく日本風だといえるから、これをもって韓国の影響とはいいたいが、チゲの方は全くそうとしか考えられない。描かれるチゲは牛の後を背負って歩く農夫が背負うもの（写真10）と壁に立て掛けてあるもの（写真11）の2点である。爪が縦木の下から3分の1乃至2分の1のところに出ており、股木式である点、その上に韓国でパソクリ（パソコリ）と呼ばれる籠を載せている点で、これがチゲだと断言できる。唯一難点があるとすれば、縦木がほぼ平行で下開角度20度以上が一般的な現在のチゲと異なる点と、爪よりも下に棧があるという2点があげられる。しかし画家を含め、民具研究者ではない一般人の観察眼においては取り敢えず縦木に棧という枠組みの構造を理解することが先であり、そこをクリアした上、それ以上形態的に似ることを要求できるかということが、まず考えられるであろう。平城京朝集殿跡地下出土の木製品<sup>(29)</sup>には爪らしい股木よりも下に棧を入れるべきホゾ穴が開けられていた。また実際に縦木が平行で爪の上部

に付いた有爪のものを筆者は実際に高知県西部や中国地方で計測していて、そのような形態が近世初頭の西日本に分布したと考えられなくもないが、ここは寧ろ、画家の想像でそうなったという方が考えやすい。パソクリは韓国では萩を縦に連ねて編むのに対し、この山雪筆の立て掛けてある方を見ると、藁を横に連ねて縦に編んだ俵風であり、畚のイメージである。この点も実際に萩が日本では藁畚になったというより、萩製だと知らない作者の想像と取る方が考えやすい。もう一つ韓国風の運搬具がある。牛が背負い、もう1点を塀のところに置いてある木枠付牛畚は韓国で良く使われる運搬具である。山雪の生きた時代の初期には文禄慶長の役があって、多くの被虜朝鮮人が日本で生活した時期に当たる。山雪が有田のある肥前生まれであることとの関連は何とも云々しがたいし、チゲが広範囲に伝播したとも考えにくい。この時期に韓国で描かれた耕作図<sup>(30)</sup>にチゲを描いたものは知られていないが、すでに失われたその類いを粉本として用いた可能性も考えられる。こうして現在筆者の知り得る日本最古の背架図は日本のものではなく、韓国のチゲを描いたものとなったのである。

日本に於けるチゲとは別の背架図は、佐藤広が関東のショイバシゴ（背負梯子）<sup>(31)</sup>に言及している。1819（文政2）年に刊行された十返舎一九の滑稽本『諸国金草鞋・身延山道中之記』「八王子」の項には大形無爪型に薪束あるいは炭俵を背負う農夫が描かれている。同じく「野田尻」「大月」の項にも薪らしいものを背負う無爪型が描かれる。葛飾北斎の『富嶽三十六景』中「駿州大野新田」、『諸国名橋奇覽』中「飛越の堺つりはし」にも大形の無爪型が描かれている。

佐藤はションバシゴ呼称についても、1832年（天保3）年の『村鏡』をあげ、さらに1834（天保5）年刊の『江戸名所図絵』『青謂社虎狢社』<sup>(32)</sup>に大形の背負梯子が描かれていることにも言及しているが、『江戸名所図絵』刊行の手本となった1780（安永9）年刊の『都名所図絵』<sup>(33)</sup>には左手に荷杖を持ち、肩縄方式で炭俵風の俵二俵を背負う男が描かれているが、荷の下から僅かに覗き見える帯風のをネコダ型背中当あるいは背架の一部と考えるには難があろう。このように絵図の希薄さが当時一般的には背負縄や背負籠が背負運搬の主流だったと見る通説を形成しているのである。しかし『都名所図絵』の描く風景は都会とその周辺の風景なのである。

## 5 チゲを描いた風俗画

チゲについての初出資料としては韓国三国時代あるいは統一新羅期の土俑<sup>(34)</sup>があげられる。チゲに大きな瓶のような荷を載せている様子が土俑として残っているが、表現が稚拙なため、正確にチゲと確定できないということを、韓国チゲ研究の一人者である仁荷大の金光彦もいっている。そしてこれに続いて古い資料となると、16世紀のチゲ呼称の登場を待たなければならない。金はチゲ呼称の初出として鄭澈の<sup>(35)</sup>『將進酒辞』をあげている。<sup>(36)</sup>

一杯飲もうぜ  
また一杯飲もうぜ  
花摘んで算おき



無盡無盡，飲もうぜ  
この体，死んだ後には  
チゲの上，筵で被って  
結ば（縛ら）れて行くかな  
流蘇實帳の派手な喪輿に乗せられて  
萬人が泣いてくれるかな<sup>(37)</sup>

これは文臣で歌人の鄭澈の歌集『松江歌辞』に収められる五編の歌辞のうちの一つである。内容としては勸酒歌の一種であるが、チゲが16世紀には葬送儀礼にもかかわる重要な民具となっていたことを示す資料として重要である。韓国ではこれを「チゲ死体」と呼んでいたという。18世紀になると多くの漢韓辞典が刊行され、チゲもそれらの項目に入っている。1775年刊の『譯語類解補』<sup>(38)</sup>は1690年刊の『譯語類解』<sup>(39)</sup>で載せられなかった項目を補う目的で増補されたもので中国ではそれほど重要ではなく『康熙字典』<sup>(40)</sup>に載せられなかった項目で韓国では重要なものを選んで増補したと考えられる。チゲには「背挾子」の漢字があてられているが、金は1748の『同文類解』<sup>(41)</sup>にも「背挾子」があてられていることを指摘している。1778年の『方言類釋』<sup>(42)</sup>では「背架子」というチゲの漢字表記が用いられている。これらはともに意識されたもので中国での現在の背架呼称である。これに対して、意音両訳を兼ねたというべき表記として「負持機」が1776年の『増補山林經濟』に出てくることを金は指摘している。

これらの辞典が刊行された18世紀後半には山水画家で最も著名な風俗画家でもある金弘道（1745～1817前後）が活躍した時期と重なる。表2に示すとおり韓国に於けるチゲを描いた絵画資料は驚くほど新しい。15～17世紀頃の絵画に描かれた人力運搬具の多くが棒（中国の扁担<sup>ビエンタン</sup>や扞担<sup>チエンタン</sup>）である。これは日本の四季耕作図同様、漢画を学んだ画家による形式の踏襲であったため、当然のことであろう。彼らに、そこにある風景を描こうという感情はなかったのである。漢画（山水画）は形式を守る中で描かれる心象画像なのである。ただ李明郁（17世紀半～18世紀初）の『漁樵問答圖』<sup>(43)</sup>は現在韓国では使うことのない典型的の天秤棒を正確に描いているから、17世紀の韓国では使用された民具なのかも知れない。大和絵はともかく、『耕織図』を粉本に成立する『四季耕作図』の作者であった山水画家たちの間で、日本に於いて風景の日本化が起り、やがて装束や民具の表現まで和製化する17世紀後半から18世紀に掛けては韓国でも重要な時期であった。

沈師正（1707～69）は韓国山水画を代表する朝鮮後期の画家の一人である。1766年に描いた『霸橋広尋梅圖』<sup>(44)</sup>は雪溪を背景にした橋の袂に驢馬の老人と荷担ぎの侍者が行きがかるという典型的の浙派のモチーフを踏襲した山水画である。しかしこの沈師正筆とされる『山水人物圖』<sup>(45)</sup>には、同じ橋上にチゲで瓶のような荷を背負った裸歩商（ホブサン・チゲクン）と思しき人物が描かれている。李寅文（1745～1821）の『江山無尽圖』<sup>(46)</sup>は壮大な構想のもとに描かれた李朝後期最大の長巻である。ここに描かれる運搬具は表2に示すとおり前後担ぎの扁担（天秤棒）が15と最も多く、これに推車や袋担ぎといった取り合わせは中国の絵画資料と同じである。さら

には金斗梁（1696～1763）・金徳夏（1722～72）の『桃李園豪興圖卷』（47）でも薪や稲藁の運搬に扞担（尖棒）が使われている。

さて金弘道は初期の作品『行旅風俗屏風』（48）（1778）で7箇所頭上運搬に混じって、2箇所にチゲを描いている。後部を描いた方からは縦木の爪下寸法が5センチメートル程度と、チゲとしては珍しいことが、前面を描いた方からは四本棧のようだが、上部2棧が背当部の上に集中していることが示されている。前者は日本の有爪化型との共通性を感じさせ、後者は山雪作で示されるものと共通し、現物としては筆者が済州島で確認したチゲに似ている。また背中当が縄縦巻のようなのはまさしく日本式と共通する。1804年の『耆老世聯契圖』（49）に描かれているチゲも背中当に背負縄を付けただけの形態で本来のチゲとは異なっている。当時のチゲのバリエーションが現在よりも豊かで、しかも中国や日本の背架に似たものもあったと考えることも可能である。金弘道の代表的風俗画『風俗畫帖』（50）には6点のチゲが描かれている。これらは一見典型的チゲに見えるが、傾向としては前述のもの同様爪下の長さが短めに描かれ、あるいは背当部縄縦巻を思わせる。しかし縄と思しきものは編目が交互になっていて角形背中当のようにも見える。絵の巧みさから信用してしまいそうではあるが、細部については曖昧さが残っており、それから考えると、爪下の短い特徴はチゲの特徴というよりも作者の描写の癖と受け止めるべきかも知れない。金俊根『箕山風俗畫帖』（51）には爪下の長いチゲが多く描かれている。ただ背中当が大形角形背中当あるいは縄縦巻のような描き方をしているのである。

金弘道作『負商圖』（52）は畚のようなものを背負縄で背負っている。裸負商の象徴ともいうべきチゲを背負わないのが印象に残る。また『神仙圖』では、中国的伝統に習って笈を登場させる。しかしこの笈は前に湾曲せず、上部のみ後ろに湾曲させている。

金は山水画に韓国風俗を登場させて数多くのチゲも描いたが、その金の絵画においても、チゲと頭上運搬のみが運搬具ではなかった。権用正（1801～？）の『裸負商』（53）は画面に大きくチゲが描かれているが、これも背当部は曖昧である。同時代の李亨祿（1808～？）作『雪中向市圖』（54）には典型的チゲが描かれているが、同時に背負縄による運搬も描かれている。チゲが11点も登場する『京畿監營圖屏風』（55）（19世紀・作者不詳）にも背負縄が11点描かれている。ただ背負縄は共通して僧侶らしき人によって背負われている。

日本では、二宮金次郎が薪を背負って読書する姿が昭和初期に学校に普及した銅像によって馴染み深いですが、中国では扞担（尖棒）を担いで読書するという構図が用いられている。劉運弘（1797～1859）作『負薪讀書圖』（56）は、この中国のモチーフをそのまま踏襲したものと見える。山水画に登場すべき姿はチゲを背負う少年ではなく、尖担を担ぐ少年なのである。金弘道以降の時代にあっても山水画は心を写すが一般に写生をする芸術ではなかったのである。しかしでは全く扞担は使われなかったのだろうか。これは甚だ疑問である。あるいは扁担（担棒・天秤棒）はなかったのだろうか。韓国では水桶や肥桶を吊るした棒さえ背負ってしまう。（57）これはムルチゲ、トンチゲ（コルムチゲ）と呼んでいる。筆者が知るムルチゲの絵画上の初出は前述の『京畿監營圖屏風』及び『練光亭宴会圖屏風』である。何れも19世紀になって描かれたものである。チゲ多用

の風俗が徐々に普及し、やがて棒担ぎすべきところまでチゲによる背負運搬が席卷したとは考えられないだろうか。一方に山水画が韓国の事実を写すものではなく、中国の原風景からなかなか脱却できなかったという現実があるから、運搬具の絵画上の編年は無意味のように見える。しかし慎重に行わなければならないのは確かにしても、全く退けるべきではないように思えるのである。

こうして韓国に於ける背架（チゲ）描写を考えてきたが、それが早い時期から使用されたこと、しかしそのみが運搬具ではなく、しかも絵画、文献ともに記述された時期が比較的新しいという事実が浮かんできたのである。また狩野山雪の『四季耕作図屏風』からすると、近年使用されるチゲの形態は少なくとも500年は続いているのだが、バリエーションが近年ほど貧弱であったかどうかは金弘道の絵画などから甚だ疑問である点が確認された。このことは韓国のチゲが中国の背架と繋がらないとする磯貝勇<sup>(58)</sup>や小野重朗<sup>(59)</sup>、金光彦<sup>(60)</sup>の説への疑問も提示する。現に金光彦の論文「スジ研究Ⅰ」には、無爪でA字形をしたチゲが報告されている。A字の先にさらに棒を立てて、そこへ荷を吊るす様式である。貴州で収集したチゲに似る無爪背架と似てはいないが、つい連想してしまう。筆者は陝西省寧陝県で托架という担運搬具を見たが、それを背負わせるとA字形チゲに似ている。韓国に於けるチゲの独自の発達は誰もが認めることである。しかしこれは適応の結果なのであり、起源の違いだと断言できる証拠はどこにもない。『谿山行旅圖』の背架は遠い起源に於いて韓国のチゲと繋がっていたと考えても何ら不自然ではないのである。湾曲の背架は韓国全羅北道のチゲや豊後型に共通している。さらにそれらに共通する爪の葛吊るしという特徴が秦嶺の背架にも見られることが調査で明らかになった。詳細は前述の「秦嶺の背架と托架」を参照して欲しい。このことは韓国あるいは日本の背架が大陸深くに起源を持つと考え得ることを示唆しているのである。

## 6 その向こうに西アジアがあるか

『ウルスタンダード（旗章）』<sup>(61)</sup>として知られるウル第一王朝期（前2450頃）の墓地（779号墓）からの出土遺物は2枚貝、ラピス・ラズリ（青金石）、赤色石灰石、ピチュメン（瀝青・天然アスファルト）をモザイク状に木製素地にはめ込んだ衝立形六面体である。表裏2面には「戦争」「平和」と呼ばれる部分、側面には「神話」と呼ばれる部分があり、一つの物語を構成しているともされるが、注目すべきは祭祀の様子とも考えられる「平和」面の運搬習俗である。

3段に分けて描いてあり、最下段には捕虜らしい人々の奉納運搬の様子が描かれる。手持ちによる羊毛あるいは羊そのものを肩担ぎ運搬する人が3人、穀物らしいものを前額運搬（頭背負）する人が3人。これに先行する出土遺物『カファジェの奉納板』（石灰岩製・前2600頃）には頭上運搬する3人と、2人が棒を差担いする様子が描かれており、これと合わせると、頭上・前額背負い、差担いという当時の運搬のバリエーションの一部が窺える。

さて問題は頭背負いする3人のうちの2人の背負う道具である。写真14で解るように、明らかに杵形をしたものが荷と背中の中に添えられている。穀物を入れた袋が木杵にくくりつけられ、

そこへ頭繩が掛けられているようだから頭繩が運搬具であって木枠は繩を伴う独立した運搬具でない可能性もあるが、背架そのものといっても通用する画像資料である。これが背架であれば2本の縦木は平行で無爪型ということになり、中国や日本に分布する形態に酷似する。笈（背箱）ではなく、背架そのものとしては北宋から3400年を溯ることになる。

犁がエジプト新王国期に属するナクトの埋葬パピルス（第18～19王朝）、セネジェムの墓壁画（第19王朝）、あるいはアンハイ及びアーアネルの埋蔵パピルス（第20王朝）<sup>(62)</sup>等の絵画資料、あるいはバビロン第2王朝の円筒印章から前19～12世紀には広くオリエントで使用されていたことが確認されているが、『ウルのスタンダード』はさらにそれを溯る資料であり、これが東アジアの背架に繋がるとすれば、まさに文明誕生以来の民具だということになる。

1877～88年刊“LE COSTUME HISTORIQUE”はフランスのデザイナー、オーギュスト・ラシネが描いた全6巻の服装史で2～6巻に500枚にのぼる図版が収められている。その中にスイスの「ベルン州の山岳地帯の女性」<sup>(63)</sup>と解説される図版がある。女性の右手は、地上より一段高いところに置かれ杖で支えられた背架の荷の上に載せられている。背架は平行な縦木とそれに挟まれた背板、爪あるいは板台、斜めに取り付けられた革製の背負繩で構成される。あるいは片方の肩に引っかけて物を運ぶのかも知れない。同書には同じベルン州のミルク用背負箱も描かれており、背架をも含めた運搬文化が広くユーラシア大陸の東西に共通することを認識させられる。グアテマラの物売人形<sup>(64)</sup>が背負っているのは4本の縦木に紐を巻き付けたもので4本足の略笈の構造を持つ背架の一種である。

こうして絵画資料等に目を向けることによって、これまで閉鎖的時空で論じられてきた運搬具研究、なかんずく背架研究が広大な調査領域に解き放たれた。これまである地域の、小さな現象として完結しているもののように論じられてきたことが実はそうではなかった可能性が出てきた。勿論作る技術を備えた個々の民族がそれぞれの地域で背架を作った可能性はある。ただこれまでは自生の論理だけがまかり通っていた。それが絵画資料等によって背架といえども犁同様伝播の可能性があることを確認できたということであろうか。

## 7 『清明上河圖』の世界

絵画資料は膨大で、しかもそれら一つ一つには描く側の事情がある。ゆえに資料としては限界があるし、慎重に扱わなければ論文の体裁を取る小説を書くことになってしまう。では避けるべきか。否である。我々に資料を選ぶほど多くの資料が残されているわけではない。恐れず考え得るあらゆる資料を活用する義務が我々にはあるはずである。

笈について考える際に前述した張拓端『清明上河圖』は日本の高校でも世界史教科書や図表に採用されていて馴染み深い。これにはいわゆる写しではない中国各時代の多くの模作がある。このことは全体の構図を踏襲しながらも細かな描写については時代の、あるいは画家の住んだ地域の様子を色濃く反映するという結果をもたらした。例えば、構図の中心となる橋の形状にしても最初木造だったものが石造になり、最後の清乾隆時代のものになると、随分立派になっている。

数軒橋上に出ていた行商の仮店舗は橋の沿道両側に隙間なく出された本格的店舗に変わってしまう。こういった比較によって一定の風俗の傾向、あるいは当時画家の間で考えられていた原風景の移り変わりというものを指摘することはできないだろうか。

筆者は表1に示すように北京本を含めて4作のほぼ全巻と1作の部分について運搬具使用のリストを作ることができた。北宋の首都開封の清明節の賑わいを写した信頼できる絵画資料とされる張拓端の『清明上河圖』は北京故宮博物院本である。前述のように、ここには33箇所の扁担が描かれ、中国の担ぎ文化というか、棒一本文化を色濃く映している。扁担は山水画の構成要素の一つであるから、中国人に取って最も一般的な運搬具であったことは疑いないし、実際に中国の田舎を旅行した者なら頷けるだろう。筆者の知る扁担の初出は後漢時代の成都画像磚取穫圖<sup>(65)</sup>である。同じ後漢時代の酒造圖画像磚には手推車（独輪車）が描かれているが、『清明上河圖』でも6箇所に描かれている。元時代の趙雍筆については部分しか見る機会がなかったが、扁担がほとんどを占め推車も描かれていた。

明の仇英（1482～1559）は明を代表する山水画家である。仇英筆『清明上河圖』<sup>(66)</sup>（東京大倉集古館蔵）は原作よりもかなり規模が大きくなっており、筆者の数えた範囲では、扁担も倍以上の87を数え、6箇所にしか見られなかった運搬具なしの肩載運搬が26と膨れ上がると同時に推車も15に増えている。これに対し、同じ明の趙浙が1575年に描いた『清明上河圖』<sup>(67)</sup>（岡山林原美術館蔵）では袋を肩に載せた運搬が107と圧倒的に増え、扁担は前後担、片担併せても八九に止まっている。推車も19と同規模である。

清の乾隆帝時代にあたる1736年に陳枚、孫祐、金昆、程志道によって描かれた『清明上河圖』<sup>(68)</sup>（台北故宮博物院蔵）になると、前述のように橋、建物といった公共建築物が大変立派になる。空間は原作と比べ広々としている代わりに人々のいきいきとした活気は失われているように見える。運搬具では、扁担が195箇所に達しており、そのうち尖担が20、水鉤も12と豊富である。代わりに肩載は48、推車は9と押さえ気味である。推車も裸だったのが筵で綺麗に包装したものが目立つ。背負運搬では笈が原作以外では見られず、ここでは耍猴（猿回し）が目にとまった。

南宋の李嵩（1166～1243）筆『貨郎圖卷』<sup>(69)</sup>及び『市担嬰戲圖』<sup>(70)</sup>は小物行商人の細密画として知られている。扁担は吊るしている物によって職業が解る。吹糖人、売豆腐、売白薯、売涼粉等々。<sup>(71)</sup>これらを調べることから多くのことを我々は学ぶことができる。『清明上河圖』の世界は様々な風俗のあり様や変遷を我々に提示する資料となり得るのである。『清明上河圖』を例に運搬具リスト作成の例を述べたが、筆者の調査した範囲での中国絵画資料の時代別運搬具数を示したのが表4である。全体の88%を担運搬が占め、そのうち83%を扁担が占めている。続いて肩載運搬、推車が多い。頭上運搬は2.1%、背負運搬は2.7%に過ぎず、背架に至っては1点とその模倣の1点、はっきりしないのが3点あるだけである。前述した趙浙の『清明上河圖』の肩載運搬の増加以外変遷上の大きな変化は感じられない。資料が語っているのは、むしろ一つの傾向性の持続である。前述した棒担ぎの文化である。萬納寺（小池）徳子『絵巻物よりみた運搬法

の変遷<sup>(72)</sup>によると、人力運搬中担運搬の占める割合は『常民生活絵引』所収の中世絵巻で39%、『洛中洛外図屏風』で58%、『江戸図屏風』で77%である。これらは時代による変遷と取ることもできるが、多分に描いた場所や画家の視点の違いという観点からも併せ分析することが必要であろう。表2の韓国の絵画資料リストでは背負運搬が優勢で46%を占め、続いて担運搬が28%、頭上運搬が25%である。これらを並べてみると、韓国的世界から中国的世界へ変遷したと取れないこともないが、韓国の資料が、中国の清や日本の近世と同時代に偏っていることを併せ考えると、日本はやや中国的世界であるという漠然とした感触を得ることができる。我々の前には具体的な調査対象としての広域のフィールドとともに絵画資料という膨大な、しかしある一定の限界を持つ別のフィールドが横たわっている。そのフィールドを縦に横に旅しながら調査の可能性を探って行かなければならない。最後に余談を少々。筆者は民具研究に関して「見む具」研究という視点を提出した。絵画資料は広域にそれを求めなければならぬことを提示した。なぜ今さら「見む具」かという、研究者の中に「見ぬ具」研究の人が余りにも多いからである。まず形をしっかりと見て把握すること。このことから始めなければならぬ。同じものが他地域にあるのを知る。ではどうしてという疑問に答えなければならなくなる。見ざる聞かざる言わざるでは実去る着飾る胃は策になってしまう。基本的把握が誤ったそういう手合いは肝心なことを知ることなく身につくものは何もないだろう。もはや身を飾るくらいしか残されていない。

## 註

- (1) 鎌倉期の作といわれるが、作者不詳。東京国立博物館蔵。
- (2) 織野英史「雲貴高原の背架」『民具マンスリー』28巻8号、1995。
- (3) 岡崎譲治「修験道伏杖概説」『MUSEUM』第347号、ミュージアム出版、1980。
- (4) 『特別展図録・写経と摺経』神奈川県金沢文庫、1995を見よ。写真はこれより所有者の金剛院の了解を得て複写。
- (5) 河原由雄「慈恩大師画像の成立とその変遷」『慈恩大師御影聚英』法蔵館、1982。写真は拓本刷、筆者所蔵。
- (6) 傳熹年編『中國美術全集絵畫編3 兩宋絵畫上』文物出版社、1988。
- (7) 長澤和俊編『大英博物館5 中央アジア・東西文明の十字路』日本放送出版協会、1991。
- (8) 秋山光和「敦煌画虎をつれた行脚僧をめぐる考察」『美術研究』第238号、1964。
- (9) (6)を見よ。
- (10) 松本榮一『敦煌画の研究・圖像篇』(復刻版)同朋舎出版、1985。
- (11) 香川量平氏提供。
- (12) (3)を見よ。
- (13) 石田茂作「笈の研究」『吉備考古』86・88、1954。『仏教考古学論改5 仏具編』思文閣出版、1975。
- (14) 浜松歌国『日本廻国勸懲記』1815、国立国会図書館蔵。

- 喜代吉榮徳「六部回国行者の姿と笈」『四国辺路研究』海王舎，1995には石像や宝篋印塔の塔身部レリーフや『阿波名所図繪』を紹介している。
- 藤田定興「六十六部・行者の笈」『福島考古』第32号，1991。
- 小嶋博巳「廻国行者と天蓋六部」『宗教民俗研究』第3号，1991。
- (15) 王圻・王思義『三才圖會』1609前後，上海図書館蔵正本影印本，上海古籍出版社，1985。  
R. H. VAN GULIK “Chinese Pictorial” Art” Roma, 1958
- (16) 洪沢敬三編『繪卷物による日本常民生活繪引』五，角川書店，1968。
- (17) 小松茂美編『続日本の繪卷9 慕婦繪詞』中央公論社，1990。
- (18) 写真は京都の西本願寺蔵。浄土真宗本願寺派提供。
- (19) 王耀庭『中国繪画のみかた』二玄社，1995。全体像は(6)を見よ。
- (20) 染木煦『北満民具採訪手記』座右宝刊行会，1941。  
染木煦「山西省の風土と民具」『日本民族学研究』新一卷三号，1943。
- (21) 王文虎・張一舟・周家筠編『四川方言詞典』四川人民出版社，1987。角川『中日大辞典』のために大東文化大学中日大辞典編纂室の依頼で四川省方言をまとめた編纂者が刊行。
- (22) 『小中現大圖冊』王翬は盛んに模写を行っている。
- (23) 大和文化館編『特別展狩野山雪』1986。
- (24) 渡部武「中国農書耕織図の流伝とその影響について」『東海大学紀要』文学部，第46輯，1987。  
渡部武「探幽縮図中の耕織図と高野山遍照院所蔵の織図について」『東海大学紀要』文学部，第50輯，1989。
- (25) (6)を見よ。
- (26) 傳嘉年編『中國美術全集繪畫編4 兩宋繪畫下』文物出版社，1988。
- (27) 表2を見よ。金炯秀編『韓国的美21檀園金弘道』中央日報社，1985。
- (28) 八曲一隻。室町末の作。東京国立博物館蔵。山崎和文編『田園風俗画』佐賀県立美術館，1988。
- (29) 「上灌子遺跡出土背負梯子形木製品について」『民具マンスリー』第28巻4号，神奈川大学日本常民研究所，1995。
- (30) 鄭炳模「朝鮮時代後半期의 耕織圖」『美術史學研究』192，韓國美術史學會，1991。
- (31) 「近世の繪図類にみえる背負梯子」『村鏡』青梅市史料集第1・2号，1980  
「近世多摩の背負梯子」『八王子市郷土館だより』No. 20，1983。
- (32) 卷之三「青謂社虎狛社」，筆者は塚本哲三編『江戸名所圖繪』2，1927，301頁によった。
- (33) 『都名所圖會』天明六年再板本（筆者所蔵），卷之一，一條戻橋によった。
- (34) 李蘭暎『토우(土俑)』大円社，1991。  
金光彦「지게研究Ⅰ」『古文化』42・43合輯，1993。
- (35) 李弘植編『씨国史事典』教學社，1983，1209頁。  
伊藤重人他監修『朝鮮を知る事典』平凡社，1986，306頁。

- (36) 『將進酒辞』は五編の『歌辞』の一つで歌集『松江歌辞』に収録。作者は李朝中期の文臣で、歌人。西人派の頭目として闘争にかかわる。
- (37) 翻訳は金妍珠（釜山市）。
- (38) 『譯語類解』影印本『補編』1775, 垂細亜文化社, 1974, 342頁, 「背挟子」。
- (39) 『同右』1690, 2～250頁。
- (40) 同文書局原版『康熙字典』中華書局, 1958。
- (41) 金光彦『韓國農器具考』韓国農村經濟研究院, 1986。
- (42) 『方言類釋』1778, 弘文閣, 1985, 174頁。
- (43) 李宋碩編『韓國의美11卷山水畫(上)』中央日報社, 1980。
- (44) 安輝濬『韓國絵画史』吉川弘文館, 1987。
- (45) 崔淳雨編『韓國美術全集(日本語版)12卷絵画』同和出版公社, 1973。
- (46) 李宋碩編『韓國의美12卷山水畫(下)』中央日報社, 1982。
- (47) 釜炯秀編『韓國의美19卷風俗畫』中央日報社, 1985。
- (48) (28) を見よ。
- (49) 同上。
- (50) 同上。
- (51) (47) を見よ。
- (52) (28) を見よ。
- (54) (46) を見よ。
- (55) (47) を見よ。
- (56) (46) を見よ。
- (57) (51) を見よ。
- (58) 磯貝勇「背負梯子について(予報)」『民族學年報』第一卷, 1938。  
磯貝勇「背負い梯子—背負い運搬とその用具—」『日本の民具』角川書店, 1958, 岩崎美術社, 1971。
- (59) 小野重朗「南西日本のカリコをめぐって」『鹿児島民具』鹿児島民具学会, 1984, 『民具の伝承』慶友社, 1985。
- (60) 金光彦「스지研究Ⅰ」『古文化』42・43合輯, 韓國大學博物館協會, 1993。  
金光彦「스지研究Ⅱ」『古文化』44輯, 韓國大學博物館協會, 1994。
- (61) 谷一尚「ウルのスタンダード」『名画への旅 美の誕生』講談社, 1994。
- (62) 鈴木まどか「死者の書—パピュルスの挿絵」『名画への旅①美の誕生』講談社, 1994。
- (63) オーギュスト・ラシネ原著, マール社編集部編『民族衣装』1994。
- (64) 光芸出版編集部編『骨董・アンティーク価格図鑑』光芸出版, 1983。
- (65) 「收穫図画像摺」成都羊子山一号出土。  
「酒造図画像摺」1979年, 四川省新都県新龍郷出土。『中國の博物館・四川省博物館』講談



社, 1988。

「羊形壺売酒屋図画像博」1986年, 四川省彭県昇平郷収集。『中國の博物館・四川省博物館』講談社, 1988。

- (66) 貫達人編『図説日本の歴史6 鎌倉の幕府』集英社, 1974。
- (67) 筆者は林原美術館の協力により, ポジ写真により全体を確認している。
- (68) 筆者は京都の陶版名画の庭(複製)で確認した。
- (69) (6)を見よ。
- (70) (19)を見よ。
- (71) 叶大兵他編『中国風俗辞典』上海辞書出版社, 1990。
- (72) 萬納寺徳子「絵巻物よりみた運搬法の変遷」『民具論集』4, 慶友社, 1972, 木下忠編『背負う・担ぐ・かべる』岩崎美術社, 1989。

## 付表

- 1. 中国における背架扁担等の現れる絵画資料
- 2. 韓国における背架(チゲ)扁担等の現れる絵画資料
- 3. 西アジア等における背架扁担等の現れる絵画資料
- 4. 絵画資料運搬具登場数表

表1. 中国における背架扁担等の現れる絵画資料

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
銅鼓形貯具器腰部陰刻行列圖	前漢	(不明)	前2~1c	頭上	30	滇国、雲南省晉寧県石寨山出土
成都画像磚製塩圖	後漢	(不明)	後1~2c	背蓑	2	成都羊子山1号出土
成都画像磚取糶圖	後漢	(不明)	後1~2c	扁担	1	尖棒に見える
酒造圖画像磚	後漢	(不明)	後1~2c	扁担	1	酒瓶前後担、四川省新都県新龍郷出土
酒造圖画像磚	後漢	(不明)	後1~2c	推車	1	手押独輪車
羊形壺売酒屋圖画像磚	後漢	(不明)	後1~2c	扁担	1	酒瓶前後担、四川省彭県昇平郷出土
羊形壺売酒屋圖画像磚	後漢	(不明)	後1~2c	推車	1	手押独輪車
道具運搬侍女俑	隋	(不明)	595	肩載	1	河南省安陽県予北紗廠張盛夫妻墓出土
夜叉棒塔圖	龜茲	(不明)	~7c	頭上	1	龜茲(庫車)第163窟左廊右壁
夕夜歸莊圖	唐	盧鴻	7~9c	扁担	1	前後担
胡人商人俑	唐	(不明)	7~9c	胸繩	2	陝西省西安市出土
山水百牛圖卷	唐	戴暉	7~9c	扁担	5	前後担1片担4
維摩經變相圖	唐	(不明)	618~712	頭上	1	敦煌第335窟北壁
法華經變相圖	唐	(不明)	712~763	扁担	1	前後括担、敦煌第23窟北壁西側
法華經變相圖	唐	(不明)	712~763	荷鞍	1	敦煌第45窟南壁西側
明皇幸蜀圖軸	唐	李昭道	8~9c	荷鞍	3	合譜背架形荷鞍、有疑宋代写本
報恩經變相圖	唐	(不明)	763~904	胸繩	1	敦煌第85窟南壁東側序品

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
行脚僧像(唐僧取経圖)	唐	(不明)	781~920	笈	1	敦煌莫高窟藏経洞出土絹絵行脚僧連虎
行脚僧像(唐僧取経圖)	唐	(不明)	849~920	笈	1	敦煌莫高窟藏経洞出土絹絵行脚僧連虎
行脚僧像(唐僧取経圖)	唐	(不明)	849~920	笈	1	敦煌紙絵行脚僧連虎(韓国国立博物館本)
行脚僧像(唐僧取経圖)	唐	(不明)	10c前半	笈	1	敦煌紙絵行脚僧連虎(中山正善本)
観音應化圖卷	南詔	(不明)	738~902	扁担	2	前後担
雪景圖軸	後梁	荆浩	889~23頃	扁担	6	前後担6、山西沁水人
關山行旅圖軸	後梁	關全	907~23頃	扁担	5	3片担3、背負らし2有、長安の人
行脚僧像(唐僧取経圖)	五代	(不明)	10c	笈	1	敦煌紙絵行脚僧連虎(ベリオ本)
行脚僧像(唐僧取経圖)	五代	(不明)	10c	笈	1	敦煌紙絵行脚僧連虎(スタイン本)大
行脚僧像(唐僧取経圖)	五代	(不明)	10c	笈	1	敦煌紙絵行脚僧連虎(スタイン本)小
五台山圖	五代	(不明)	10c	扁担	2	片担、敦煌第61窟西壁中央
五台山圖	五代	(不明)	10c	胸繩	2	頭繩か、敦煌第61窟西壁中央
江行初雪圖	南唐	趙幹	10c	扁担	2	1つは棒に片担いか
關口盤車圖卷	五代	(不明)	10c	扁担	3	両肩担、水桶、他に肩載有り
關口盤車圖卷	五代	(不明)	10c	推車	1	一輪車、他に二輪車5有り
雪山行旅圖軸	北宋	(不明)	10c頃	扁担	4	3片担1、北方山水画
茂林遠岫圖卷	北宋	李成	916~67	扁担	1	山東黄淮、棒に片担いか
晴巒蕭寺圖軸	北宋	李成	916~67	扁担	1	前後担1
漁父圖卷	北宋	許道寧	970~1053	扁担	1	片担、長安の人
溪山樓觀圖軸	北宋	燕文貴	976~1022	扁担	1	前後担、吳興(浙江湖州)の人
江山樓觀圖卷	北宋	燕文貴	976~1022	扁担	2	前後担或いは片担
臨王維江干雪霽圖卷	北宋	燕文貴	976~1022	扁担	1	前後担1
谿山行旅圖軸	北宋	范寬	1023~31	背架	1	陝西華山、驢馬(または馬)追う人が背負う
雪山蕭寺圖軸	北宋	范寬	1023~31	扁担	1	前後担1、陝西華山人
晴巒蕭寺圖軸	北宋	(不明)	11c?	扁担	2	棒前後突担式か、北方山水画
春山圖卷	北宋	燕蕭	~1040	扁担	2	棒前後突担式2
漁村小雪圖卷	北宋	王詵	1064	扁担	1	片担1、山西太原人
早春圖軸	北宋	郭熙	1072	扁担	1	棒前後担、河南温縣の人
蓮社圖軸	北宋	李公麟	1049~1106	扁担	1	他に差担、舒城(安徽)~龍眠山莊
幽風圖卷	北宋	李公麟	1049~1106	扁担	7	尖棒1、水桶1
幽風圖卷	北宋	李公麟	1049~1106	背繩?	1	
幽風圖卷	北宋	李公麟	1049~1106	推車	4	
陶淵明歸隱圖卷	北宋	李公麟	1049~1106	扁担	1	
陶淵明歸隱圖卷	北宋	李公麟	1049~1106	背繩?	1	
慶典樂舞圖	古格		11c	胸繩	2	板横連、西藏札達古格都城紅廟
採藥圖軸	遼	(不明)	907~1125	背籠棒	1	背籠に棒立て、山西雁縣木塔
法華經刊本	北宋	(不明)	960~1127	扁担	1	前後担
賣薪誦書圖	北宋	張舜民	960~1127	扁担	1	尖棒で薪売り
雪江歸棹圖卷	北宋	趙佶	11~12c	扁担	2	片担1、神宗第11子
送郝玄明使秦書畫合璧圖卷	北宋	胡舜臣	1122	扁担	2	前後担1、片担1、浙江人
清明上河圖卷	北宋	張昉端	12c前半	頭上	3	汴京(開封)、作者は山東省東武の人
清明上河圖卷	北宋	張昉端	12c前半	扁担	33	前後26(鈎3)片7、輿差2、肩載6
清明上河圖卷	北宋	張昉端	12c前半	背繩	2	背籠袋(籠)1
清明上河圖卷	北宋	張昉端	12c前半	笈	1	上部湾曲型、僧侶が背負う
清明上河圖卷	北宋	張昉端	12c前半	背袋	1	他に包1、他に背載2
清明上河圖卷	北宋	張昉端	12c前半	推車	6	一輪車、他に二輪牛車6
溪山無盡圖	金	(不明)	12~13c	扁担	1	前後担、北方山水
山水圖册	金	李山	1121~1202	扁担	1	前後担、山西平陽人
佛本行經變	金	王達	1167	頭上	1	山西繁峙巖山寺壁画
佛本行經變	金	王達	1167	推車	1	山西繁峙巖山寺壁画
耕織圖卷	南宋	樓璣	1145	扁担	7	尖棒3他に差担1、鄞縣人、臨安に過ごす
溪山行旅圖頁	南宋	朱銳	1120~61	扁担	1	片担1、他に牛車2
雪溪行旅圖頁	南宋	朱銳?	1120~61	牛車	4	
茗園賭市圖	南宋	劉松年	1185~94	扁担	1	錢塘人
故事人物圖册	南宋	劉松年	1185~94	扁担	1	尖棒1
盤車圖軸	南宋	(不明)	12~13c	推車	2	他に牛車1
耕種圖頁	南宋	(不明)	12~13c	扁担	7	3尖棒2、他に差担1
蠶織圖卷	南宋	(不明)	12~13c	扁担	3	江浙、前後桑籠、桑葉採取描く
貨郎圖卷	南宋	李嵩	1211	扁担	1	小物行商人の細密画
市担嬰戲圖	南宋	李嵩	12~13c	扁担	1	小物行商人の細密画
巖間古寺圖	南宋	賈師古	12~13c	笈	2	行脚僧旅姿遠景
八高僧故事圖卷	南宋	梁楷	1201頃	扁担	2	鈎付棒、陶壺水汲み

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
杜甫詩意圖卷	南宋	趙葵	1186~1266	扁担	1	無荷竹林行、潭州衡山(湖南省)
大儼圖軸	南宋	(不明)	12~13c	扁担	1	片担、除疫習俗の風俗画
江山万里圖卷	南宋	趙敷	12~13c	扁担	8	両担5、片(無)3、鎮江の人
幽風七月圖卷	南宋	馬和之	1131~62頃	扁担	3	前後担
陳風圖卷	南宋	馬和之	1131~62頃	扁担	1	前後担
秋山行旅圖	南宋	江參	12~13c	扁担	1	前後担、湖州に住む
模樓塋耕作圖卷	南宋	程粲	12~13c	扁担	7	耕織圖卷に同じ(含尖棒3)
中山出遊圖卷	南宋	龔開	1222~1304	扁担	6	両突担1、鈎1、片4、江蘇淮陰人
天竺靈籤插圖	南宋	(不明)	1250前後	扁担	2	両担1、片1(傘)
天竺靈籤插圖	南宋	(不明)	1250前後	推車	1	独輪車1、他に荷車(二輪車)1
永樂宮重陽殿東壁畫王重陽故事	元	(不明)	1262~	頭上	1	山西省芮城縣永樂宮東壁南部
溪蠻戲笑圖卷	元	(不明)	13~14c	背篋?	1	背負運搬
盧構運筏圖軸	元	(不明)	13~14c	扁担	6	前後担5(うち尖棒2)片担1(尖棒)他に肩載5
盧構運筏圖軸	元	(不明)	13~14c	欄架	3	背篋か背架か不明、北京盧構橋
盧構運筏圖軸	元	(不明)	13~14c	推車	9	他に二輪車4
樓閣山水圖軸	元	孫君澤	13~14c	肩載	1	対幅
帰荘圖卷	元	何澄	1217~1309	担繩	1	または担袋
七賢過關圖卷	元	錢選	1239~99	扁担	1	前後担、浙江吳興人
洪崖行吟圖卷	元	錢選	1239~99	扁担	1	片担1、他に担繩1か
清明上河圖卷	元	趙雍	13~14c	扁担	14	前後担
清明上河圖卷	元	趙雍	13~14c	推車	1	
農書農器圖譜	元	王禎	1313	胸繩	1	桑取縮籠胸負、山東~安徽~江西
農書農器圖譜	元	王禎	1313	扁担	10	うち尖棒1、他に二輪車2
臨王維輞川圖卷	元	商奇	~1323	扁担	1	前後担、曹州濟陰人
明應王殿壁畫	元	王冕・趙謙	1324	扁担	1	魚籠、山西洪洞廣勝寺水神廟
春江待渡圖軸	元	盛懋	1351	扁担	1	前後担か、嘉興魏塘鎮人
村家芸事圖	元	盛懋	1351頃	扁担	1	前後担か、嘉興魏塘鎮人
太白山圖卷	元	王蒙	~1385	扁担	1	陝西太白山、浙江岩湖~仁和~山東泰安知
葛稚川移居圖軸	元	王蒙	~1385	扁担	1	他に紐にて舂など担ぎ?
羅浮山樵圖	元	陳汝言	1366	扁担	2	前後担?
明人大平春市(風俗)圖	明	(不明)	14c	扁担	1	曲物を前後に担ぐ
華山圖冊	明	王履	1382	扁担	3	陝西華山、前後2片1、江蘇崑山人(1332~)
溪橋策蹇圖	明	戴進	1388~1462	扁担	2	棒前後担、浙江省錢塘の人
雪景山水圖軸	明	戴進	1388~1462	扁担	1	前後担
杏園雅集圖	明	戴進	1388~1462	差担	1	
溪山游賞圖冊頁	明	黃希穀	15c	扁担	1	
雲陽早行圖軸	明	謝縉	1417	扁担	1	
樓閣山水圖	明	石銳	1426~35頃	扁担	1	片担、杭州人
聖蹟圖刊本	明	(不明)	1444	扁担	7	前後担1、日傘等片担6
聖蹟圖刊本	明	(不明)	1444	荷車	12	牛車
歸去來兮圖卷	明	馬軾	1449頃	扁担	1	前後担、他に日傘片担い
山水圖軸	明	張復	1400~82	扁担	1	前後担
貨郎圖軸	明	(不明)	1426~36	扁担	1	前後担、行商
古賢詩意圖卷	明	杜堇	1465~87	推車	1	丹徒(江蘇鎮江)人~燕京(北京)
報德英華圖卷	明	沈周	1469	扁担	1	前後担、長洲(江蘇吳縣)人
白雲泉圖卷	明	沈周	1427~1509	扁担	1	片担、蘇州近郊山水、天平山見える
蘇州山水全圖卷	明	沈周	1427~1509	扁担	6	前後2、片担4、蘇州近郊山水
虎跑泉圖冊	明	沈周	1427~1509	扁担	1	前後水桶担
幽居圖軸	明	沈周	1427~1509	荷車	1	牛車
寒山積雪圖	明	吳偉	1459~1508	扁担	1	片担、湖北武昌人
流民圖卷	明	吳偉	1459~1508	扁担	5	前後担2、片担3
樵夫圖軸	明	吳偉	1459~1508	扁担	1	尖棒担
山水人物圖	明	吳偉	1459~1508	扁担	2	片担
寒山圖軸	明	王誥	1488頃	扁担	1	前後担、浙江奉化人
雪嶺風高圖軸	明	王誥	1506以降	扁担	3	前後担(うち尖棒1)、片担1
夕夜帰荘圖	明	(不明)	1505頃	扁担	1	前後担、浙派作品
渡頭吟影圖軸	明	唐寅	1470~1523	扁担	1	片担、江蘇蘇州人
仿黃鶴山樵山水圖軸	明	謝時臣	1517	扁担	1	前後担、江蘇蘇州人
風雨歸荘圖軸	明	張路	1464~1538	扁担	1	棒前後担
春山遊騎圖軸	明	周臣	1533頃	扁担	1	前後担、江蘇蘇州人
柴門送客圖軸	明	周臣	1533頃	扁担	1	従者、前後担
周臣流民圖卷	明	(不明)	1533頃	背篋	1	薪を背負う

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
周臣流民圖卷	明	(不明)	1533頃	背袋	1	
三界諸神圖	明	王淮	1535	扁担	1	曲物担行商、河北石家荘毘盧寺
霽雪圖軸	明	謝時臣	1541	扁担	2	前後担ぎ
劍閣圖軸	明	仇英	1482~1559	扁担	1	作者は江蘇太倉~呉県(蘇州)
山水人物圖册	明	仇英	1482~1559	扁担	1	前後担
獨樂園圖卷	明	仇英	1482~1559	扁担	1	前後水桶担?
柳下眠琴圖軸	明	仇英	1482~1559	担繩	1	鼓を紐で担ぐ
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	扁担	87	前後担81(うち袋70曲1角蒸2箱3)片袋4傘2
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	差担	15	袋10角蒸1箱2魚1輿1
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	肩載	26	袋担25袋1
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	背繩	14	角箱141
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	頭上	1	
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	推車	15	
清明上河圖卷	明	仇英	1482~1559	盤車	2	他に四輪馬車1
太行晴雪圖軸	明	謝時臣	1550	扁担	2	前後担
幽居樂事圖册	明	陸治	1496~1576	扁担	1	片担い、居太湖包山
溪山圖軸	明	陸師道	1562	扁担	1	片担い、江蘇蘇州人
秋山游覽圖卷	明	文伯仁	1566	扁担	1	江蘇蘇州人(1502~75)
秋林見句圖軸	明	萬邦治	14~17c	担繩	1	一本紐片肩担ぎ
岳陽樓圖	明	安正文	14~17c	扁担	1	洞庭湖樓閣、水桶前後担ぎ
黃鶴樓圖	明	安正文	14~17c	扁担	2	武漢蛇山樓、前後担ぎ運び人足
人物圖卷	明	張路	~1574	扁担	2	片担、浙派系画人
晴雪長松圖軸	明	錢穀	1575	扁担	1	尖棒前後担、江蘇蘇州人(1508~78後)
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	扁担	68	前後担(袋54袋8曲2箱2瓶1水釣1)
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	扁担	21	片担、他に差担17
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	肩載	107	担袋
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	背箱	7	袋ではない
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	背袋	4	
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	頭上	2	
清明上河圖卷	明	趙浙	1575	推車	19	
忠義水滸伝挿圖	明	(不明)	1589	扁担	6	前後担、他に差担1
忠義水滸伝挿圖	明	(不明)	1589	荷車	5	二輪車
木彫行列俑	明	(不明)	1589	差担	4	副葬品
日記故事挿圖	明	(不明)	1591	扁担	2	前後担1(斧または鋏)、片1(傘)
便民圖纂	明	(不明)	1593	扁担	4	前後担(尖1)
臨流圖軸	明	蔣乾	16c~17c初	担繩	1	鼓を紐で担ぐ
松壑雲泉圖軸	明	宋旭	1525~1606	扁担	1	片担、浙江嘉興人
傲王蒙輞川圖卷	明	宋旭	1525~1606	扁担	1	前後担
列仙全傳挿圖	明	(不明)	1600	扁担	4	前後担(「角鳥先生」、尖3「焦先」)
列仙全傳挿圖	明	(不明)	1600	扁担	5	片担(鋏2杖2傘1)
列仙全傳挿圖	明	(不明)	1600	担繩	2	籠「蘇林」
顧氏畫譜	明	(不明)	1603	扁担	7	前後担(尖1)片担1、他に牛車1
酣酣齋酒碑挿圖	明	(不明)	1605頃	扁担	2	前後担1、片担1(杖)
酣酣齋酒碑挿圖	明	(不明)	1605頃	担繩	1	
皇都積勝圖卷	明	(不明)	1609以前	扁担	2	前後担、他に肩載1
皇都積勝圖卷	明	(不明)	1609以前	背箱	2	袋ではない
三才圖會	明	珙・驥	1609前後	扁担	40	前後担30(尖3)、片担10(尖1)上海人父子
三才圖會	明	珙・驥	1609前後	差担	3	うち1二本x字差30、他に桑網担1
三才圖會	明	珙・驥	1609前後	荷車	2	うち1大車、他に盤車1
南都繁會圖卷	明	(不明)	16c~17c初	扁担	2	前後担、南京市街
僊山樓閣圖軸	明	李士達	16c~17c初	扁担	1	瓢筆片担、江蘇蘇州人
僊山樓閣圖軸	明	李士達	16c~17c初	担繩	1	瓢筆担
飲中八仙圖卷	明	丁雲鵬	1547~1628	推車	1	独輪車
摹郭忠恕輞川圖石刻拓本	明	郭世元	1617	扁担	1	片担1
鼎鑄陳眉公先生批評西廂記(部分)	明	(仇英)	1618刻	扁担	1	前後担1(侍者袋括)蕭騰鴻師檢堂刻
元明戲曲葉子挿圖	明	(不明)	1619頃	扁担	1	前後担1(鈎付水担)
歷代史略詩話(部分)	明	(不明)	1621	扁担	2	前後担2(糞箕担)
藏雲圖軸	明	崔子忠	1626	扁担	1	竹棒片担、山東萊陽人
藏雲圖軸	明	崔子忠	1626	盤車	1	四輪橢圓底盤車(障害者座乗車)
秋山高隱圖軸	明	陳祿	1630	扁担	1	尖棒片担、1563~1639頃、江蘇蘇州人
人物圖册	明	張宏	1616~42頃	扁担	1	尖棒1薪運搬、江蘇蘇州人(1580~)
人物圖册	明	張宏	1616~42頃	背袋	1	薪運搬

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
天工開物	明	宋應星	1637	扁担	9	籠5桶4前後担
天工開物	明	宋應星	1637	推車	2	独輪車、「推車」標記は南方で使用
高土圖軸	明~清	担当	1593~1683	担繩	1	酒瓶を紐で担ぐ
離騷圖刊本	清	蕭雲從	1645	推車	1	独輪車
山水册	清	王建章	1649前後	扁担	1	棒片担、福建泉州人
秋山聽瀑圖軸	清	樊圻	1668	扁担	1	瓶曲物前後担い、江寧(江蘇南京)人
八景圖册	清	章谷	1659	扁担	6	四川省峨嵋山、前後3片担3、浙江杭州人
仿宋元山水册	清	王鑑	1662	扁担	1	棒片担旅従者、江蘇太倉人
青緑山水圖軸	清	章聲	17c半	扁担	3	江南風景、前後担、浙江杭州人
行旅踏雪圖軸	清	章聲	17c半	扁担	4	前後担
仕女圖卷	清	顧見龍	1606~87	荷車	2	二輪車
四時山色圖卷	清	高倬	1616~87	扁担	3	前後担1、片担1
康熙帝御製耕織圖册	清	焦秉貞	1696	扁担	6	水桶2注口瓶1籠2尖棒2靴2、山東濟寧人
江山漁樂圖卷	清	王翬	1696	扁担	2	片担2
做巨然臨安山色圖卷	清	王翬	1696	扁担	2	片担2
溪山霽雪圖卷	清	王翬	1697	扁担	1	前後担か
小中見大册	清	王翬	1703	扁担	1	片担旅従者、江蘇常熟人(1632~1717)
小中現大圖册	清	王翬	1703頃	背架	1	范寬「谿山行旅圖」模写、背架は不鮮明
做王蒙溪山行旅圖軸	清	吳歷	1632~1718	扁担	2	前後2、他に荷輪荷車3、江蘇常熟人
桃源圖軸	清	顧符禎	1706	扁担	1	前後担か、江蘇興化人
做郭忠恕輞川圖卷	清	王原祁	1711	扁担	1	片担1
做趙令穰江村平遠圖軸	清	王翬	1712	扁担	1	片担1
白嶽凝煙插圖	清	吳榕	1714	扁担	1	前後担1
山水圖册	清	陸為	~1716	扁担	2	片担、浙江遂昌人
踏雪尋梅圖軸	清	蕭晨	18c前	担繩	1	江蘇揚州人
界畫山水圖扇面	清	李寅	1656~	扁担	1	前後担、江蘇江都(揚州)人
雜畫册	清	華岳	1682~1756	扁担	1	片担、福建臨汀人、長く揚州に住む
姑蘇閶門圖版画	清	(不明)	1734	扁担	3	前後担、蘇州版画
三百六十圖版画	清	(不明)	1734	扁担	5	前後担、他に背篋、蘇州版画
雪中送炭圖版画	清	(不明)	1734頃	扁担	1	前後担、他に肩載2、蘇州版画
漁樵耕讀圖版画	清	(不明)	1734頃	扁担	1	尖棒前後薪担1、他に肩載1、蘇州版画
全本西廂記圖版画	清	(不明)	1734頃	扁担	2	前後担1、片担1、蘇州版画
買魚圖版画	清	(不明)	1734頃	肩載	1	蘇州版画
清明上河圖卷	清	戴繩	1736	扁担	167	前後担(篋69袋14水鈎12尖棒20)
清明上河圖卷	清	戴繩	1736	扁担	28	片担、他に差担49
清明上河圖卷	清	戴繩	1736	肩載	48	袋34、担繩2、他に繩担1
清明上河圖卷	清	戴繩	1736	背箱	4	他に背袋2、イカサ、背縄2、箆笥背負1
清明上河圖卷	清	戴繩	1736	頭上	1	
清明上河圖卷	清	戴繩	1736	推車	9	他に二輪車3、四輪車9、馬車1、盤車1
山水圖册	清	沈蒼	1737	扁担	2	前後担1
臺閣春光圖軸	清	上官周	1739	扁担	1	前後担、福建長汀人
姑蘇萬年橋圖版画	清	(不明)	1740	扁担	1	前後担、蘇州版画
姑蘇萬年橋圖版画	清	(不明)	1740	扁担	5	前後担、蘇州版画
授時通考	清	(不明)	1742	扁担	1	
盛世滋生圖卷	清	徐揚	1751頃	扁担	14	前後担、他に差担2
盛世滋生圖卷	清	徐揚	1751頃	背繩	1	他に袋担3
乾隆南巡圖卷	清	徐揚	1751以降	扁担	9	前後担、他に二輪(馬)車11
盤車圖軸	清	袁輝	1754	扁担	1	片担、江蘇揚州人
盤車圖軸	清	袁輝	1754	背繩	1	
山水圖軸	清	黃璧	1720~80後	扁担	1	前後担、広東澄海人
福康奏報攻克大里伐圖版画	清	(不明)	1787~8	扁担	1	前後担(水桶)、平定台湾戰圖版画
授衣廣訓插圖	清	(不明)	1808	扁担	1	前後担、差担1、肩載3
授衣廣訓插圖	清	(不明)	1808	推車	1	独輪車、他に荷車2、牛車1
曲水流觴圖軸	清	蘇六朋	1853	差担	1	広東順徳人
山水圖卷	清	秦祖永	1825~84	差担	1	江蘇無錫人
臨耕煙塍溪壑菊圖卷	清	秦祖永	1825~84	差担	1	
景德鎮陶録圖說書業堂蔵版	清	(不明)	1891	扁担	12	反天秤前後担(籠8水桶2網1他1)
景德鎮陶録圖說書業堂蔵版	清	(不明)	1891	肩載	5	1815藍浦(昌南人)原著、鄭廷桂補輯
秋山夕照圖軸	清	吳石僊	1914	扁担	1	前後担、上元(南京)人
歲時圖譜(北京風俗図譜)	民国	劉延年	1926	扁担	20	前後担(鈎2曲6等)他に肩載担1
歲時圖譜(北京風俗図譜)	民国	劉延年	1926	担繩	2	うち担桶1
歲時圖譜(北京風俗図譜)	民国	劉延年	1926	推車	5	独輪車、他に馬車5、馬輿1、輿12

表2. 韓国における背架(チゲ)扁担等の現れる絵画資料

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
無踊塚主室西壁狩獵圖壁画	高句麗	(不明)	5c	背繩	1	他に肩掛網袋1、吉林省輯安県如山南麓
御製秘蔵詮版画卷六卷三圖	高麗	(不明)	11c	扁担	3	杖両担1傘片担2
弥勒下生経變相圖	高麗	悔前	1350	肩載	1	他に輿1
徽垣契會圖	朝鮮	(不明)	1540	扁担	1	前後担
雪景山水圖	朝鮮	李正根	1531~?	扁担	1	片担
北塞宣恩圖卷	朝鮮	韓時覺	1621~?	牛車	2	
夏景山水圖	朝鮮	尹毅立	1568~1643	扁担	1	前後担
泥金山水圖	朝鮮	李澄	1581~1645	扁担	1	前後担
雪中帰驢圖軸	朝鮮	金明国	1600~62	扁担	1	前後担
漁樵問答圖軸	朝鮮	李明郁	1645以降	扁担	1	前後担
桃李園豪興圖卷	朝鮮	金鏞	1744	頭上	1	金斗梁(1696~1763)金徳夏(1722~72)
桃李園豪興圖卷	朝鮮	金鏞	1744	扁担	3	尖両担、四季山水圖卷
霸橋尋梅圖軸	朝鮮	沈師正	1707~69	扁担	1	両肩担
山水人物圖軸	朝鮮	沈師正	1707~69	背架	1	チゲ瓶背負
柳川店蓬瀛圖卷	朝鮮	李麟祥	1710~1760	扁担	1	片担
柳川店蓬瀛圖卷	朝鮮	李麟祥	1710~1760	背繩	1	
群仙圖屏風	朝鮮	金弘道	1776	扁担	1	片担
江山無尽圖卷	朝鮮	李寅文	1745~1821	扁担	19	前後担15片担3片傘1
江山無尽圖卷	朝鮮	李寅文	1745~1821	担袋	1	前後担15片担3片傘1
江山無尽圖卷	朝鮮	李寅文	1745~1821	推車	2	
行旅風俗屏風	朝鮮	金弘道	1778	頭上	7	
行旅風俗屏風	朝鮮	金弘道	1778	背繩	2	他に背箱1
行旅風俗屏風	朝鮮	金弘道	1778	背架	2	チゲ、他に肩掛袋1腰付1輿1
仙童吹笛圖	朝鮮	金弘道	1779	背篋	1	
慕堂平生凶屏風	朝鮮	金弘道	1781	頭上	3	
安陵新迎圖	朝鮮	金弘道	1786	輿	1	うち馬輿1、他に馬車1
淡窩平生圖屏風	朝鮮	金弘道	18c後	頭上	1	他に傘で片担1
採葉友鹿圖	朝鮮	金弘道	18c後	扁担	1	篋1
風俗畫帖	朝鮮	金弘道	18c後	頭上	4	
風俗畫帖	朝鮮	金弘道	18c後	背架	6	チゲ
風俗畫帖	朝鮮	金弘道	18c後	背篋	1	他に背箱1片担篋1
負商圖	朝鮮	金弘道	18c後	背繩	2	網袋2
涉牛圖	朝鮮	金弘道	18c後	背架	1	チゲ
負薪騎牛圖	朝鮮	金弘道	18c後	背架	1	チゲ
負薪樵童圖	朝鮮	金弘道	18c後	背架	3	チゲ
刺繡袈裟	朝鮮	(不明)	18c	扁担	1	片担
水原陵幸圖屏風	朝鮮	(不明)	18c?	頭上	3	他に輿3
水原陵幸圖屏風	朝鮮	(不明)	18c?	背繩	1	他に馬車6
東萊府使接倭使圖	朝鮮	(不明)	18c	頭上	1	他に輿1
船遊圖	朝鮮	(不明)	18c	扁担	2	
農耕運搬民畫	朝鮮	(不明)	18c末	頭上	2	
農耕運搬民畫	朝鮮	(不明)	18c末	背架	1	チゲ
收穫民畫	朝鮮	(不明)	18c末	背架	2	チゲ
船遊圖	朝鮮	(不明)	18c	扁担	2	
三公不換圖	朝鮮	金弘道	1801	頭上	1	
知章騎馬圖	朝鮮	金弘道	1804	背篋	1	あるいは袋
耆老世聯契圖	朝鮮	金弘道	1804	頭上	4	満月臺契會圖軸
耆老世聯契圖	朝鮮	金弘道	1804	背架	2	チゲ
風俗屏風	朝鮮	金得臣	1754~1822	頭上	3	8曲
風俗屏風	朝鮮	金得臣	1754~1822	背架	2	チゲ
風俗屏風	朝鮮	金得臣	1754~1822	担袋	1	
幽風七月圖	朝鮮	李昉運	1761~?	扁担	1	尖両担
端午風情	朝鮮	申潤福	18半~19前	頭上	1	深溪遊沐圖
年少踏青	朝鮮	申潤福	18半~19前	背繩	1	
西行一千里長卷	朝鮮	林得明	1767~?	背繩	2	袋背負?
祿負商	朝鮮	權用正	1801~?	背架	1	チゲ1
金剛山民畫	朝鮮	(不明)	19c初	扁担	1	前後担1、他に差担1
京畿監營圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	頭上	8	
京畿監營圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背繩	11	袋負
京畿監營圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背架	11	チゲ11

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
京畿監宮圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背扁担	1	ムルチゲ
京畿監宮圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	担袋	2	
浮碧桜宴會圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	頭上	3	平壤監司饗宴圖屏風
浮碧桜宴會圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背縄	1	平壤監司饗宴圖屏風、他に與1
練光亭宴會圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	頭上	1	平壤監司饗宴圖屏風
練光亭宴會圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背縄	5	平壤監司饗宴圖屏風
練光亭宴會圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背扁担	5	ムルチゲ、平壤監司饗宴圖屏風
月夜船遊圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	背縄	1	平壤監司饗宴圖屏風
月夜船遊圖屏風	朝鮮	(不明)	19c	肩載	2	平壤監司饗宴圖屏風
耕織圖	朝鮮	(不明)	19c	頭上	2	
耕織圖	朝鮮	(不明)	19c	背縄	2	
耕織圖	朝鮮	(不明)	19c	背架	3	他に與1
箕山風俗畫帖	大韓	金俊根	1895	頭上	1	
箕山風俗畫帖	大韓	金俊根	1895	背縄	2	
箕山風俗畫帖	大韓	金俊根	1895	背架	4	チゲ藁担2、陶器2
箕山風俗畫帖	大韓	金俊根	1895	背扁担	2	ムルチゲ

表3. 西アジア等における背架扁担等の現れる絵画資料

絵画資料名	時代	作者	製作年	運搬具	数	描かれた状態場所作者来歴等
ウル・ナンジェの奉納板	シュメール	(不明)	前2600~2550	頭上	1	石灰岩彫刻、ラガシュ出土
ウルのスタンダード(平和の面)	シュメール	(不明)	前2450	背架	2	頭掛け、もう1点欠損したらしいもの有り
ウルのスタンダード(平和の面)	シュメール	(不明)	前2450	肩載	3	
ヘテパヘレスの輿	エジプト古	(不明)	前2600頃	輿	1	スネフェル王后所有現物
ティのmastaba供物運搬女達像	エジプト古	(不明)	前2400頃	頭上	3	副葬品、第5王朝、サッカラ
ティのmastaba壁画	エジプト古	(不明)	前2400頃	扁担	1	壺片担、レリーフ、第5王朝、サッカラ
mastaba壁画	エジプト古	(不明)	前2400頃	扁担	3	前後担2(角箱、魚等)壺片担、サッカラ
ウル・ナムム像	シュメール	(不明)	前2112頃	頭上	1	青銅像、ウル第3王朝、ニッブル出土
シュルギ像	シュメール	(不明)	前2094~47	頭上	1	青銅像、ウル第3王朝、ニッブル出土
供物運搬女達像	第一中〜中	(不明)	前22~20c	頭上	3	副葬品(ルーブル美術館蔵)
テーベ出土運搬夫木像	エジプト中	(不明)	前2050頃	胸縄	1	籠背負、副葬品
テーベ出土供物運搬女木像	エジプト中	(不明)	前2050頃	頭上	1	副葬品
テーベ出土供物運搬男女木像	エジプト中	(不明)	前2050頃	頭上	11	副葬品
テーベ出土供物運搬女木像	エジプト中	(不明)	前2050頃	頭上	1	副葬品
テルエルリ出土供物運搬女木像	エジプト中	(不明)	前2050頃	頭上	2	副葬品(ニューヨーク博物館、カロ博物館)
アシュート出土供物運搬女木像	エジプト中	(不明)	前2050頃	頭上	1	副葬品(ルーブル美術館蔵)
ベニハサン壁画	エジプト中	(不明)	前2050頃	扁担	1	
婦人マジャ棺画	エジプト新	(不明)	前1590~1400	扁担	1	瓶と鶴を前後担
ハトシェプスト-ブント交易壁画	エジプト新	(不明)	前1503~1484	差担	3	ハトシェプスト女王葬祭殿壁画
ハトシェプスト-ブント交易壁画	エジプト新	(不明)	前1503~1484	肩載	5	船積みの様子
テーベ墳墓農耕壁画	エジプト新	(不明)	前1590~1300	扁担	1	籠前後担(ルーブル美術館蔵)
テーベ墳墓農耕壁画	エジプト新	(不明)	前1590~1300	差担	1	麦収穫用籠の差担(ルーブル美術館蔵)
メンナの墓農耕壁画	エジプト新	(不明)	前1440頃	頭上	1	麦収穫用籠の差担
メンナの墓農耕壁画	エジプト新	(不明)	前1440頃	差担	2	麦収穫用籠の差担
ラモーゼの墳墓葬列壁画	エジプト新	(不明)	前1440頃	頭上	6	テーベ、アメンホテプ4世時代
黒いオベリスク	エジプト	(不明)	前830頃	頭上	2	
黒いオベリスク	エジプト	(不明)	前830頃	肩載	8	袋担、他に肩載2
アッシュールパニバル帰還図	エジプト	(不明)	前7c	肩載	19	袋担、強制移住の図
アッシュールパニバル帰還図	エジプト	(不明)	前7c	頭上	1	強制移住の図
エラム帰還図	エジプト	(不明)	前7c	肩載	3	袋担
アッシュールパニバル像	エジプト	(不明)	前7c	頭上	1	籠載
アパダナ大階段レリーフ	アケメネス	(不明)	前6~5c	肩載	4	ベルセポリス

表4. 絵画資料運搬具登場数表

	漢	後漢	魏	晉	唐	南詔	五代	北宋	古格	遼	金	南宋	元	明	清	計	運搬法別計
頭上	30		1	1			2	3					1	3	1	41	頭上 41
胸縄									2							6	前額 6
背縄								4						15	2	21	背 53
背架							3	1				2	(3)		(1)	10	背負い 47
背架袋		2						1					1	6		9	背負い 47
背架袋棒																1	背負い 1
背架袋																1	背負い 1
扁担												2	56	40	817	451	1413
差担	3			7	2		18	66			1	2	1	23	6	45	担ぎ 1685
肩載														11	4	24	
繩載							1	2					1	139	59	203	
車		2					1	5				1	38	16	72		
(荷車)								10			1	3	2	38	16	72	車力 (134)
(轆車)								6				9	2	26	10	(58)	
(轆車)														3	4		
(轆車)																(4)	畜力 (4)